1950 年代文化運動における作品発表の場

―国民文化全国集会における文化作品発表を事例に―

一橋大学社会学研究科博士課程　長島祐基

1　目的、課題：本報告の課題は、1950 年代に開催された国民文化全国集会における文化作品発表の在り方を事例として、1950 年代の文化運動における文化作品発表の場の論理を考察することにある。1950 年代はサークル運動を始めとする文化運動が活発に行われていた(鳥羽 2011)。当時の文化運動に関する研究(草野 1983;門奈 2012;河西 2013)は作られた作品や、作品が作られる過程を素材としながら、作品を作る主体の変化や作品に表わされる感情の構造、作品を作ることの政治性を描いたものが多い。他方、1950 年代の大衆集会は作られた文化作品が人々の前で発表される場でもあった(水溜 2008)。しかし、作品を作る側の論理に着目した研究はもとより、作品を見る側の論理に着目した研究(長崎 2013)でも、両者が交差する作品発表の場の論理は中心的なテーマとして検討されてこなかった。
2　方法：大衆集会と作品発表の場において問題になるのが、演者と観客の関係である。演者と観客の空間的関係や相互コミュニケーションは催事において重要な要素である(新堂2014)。また、戦後文化において作品上映の場は「まなざし」という権力性が交差する場(吉見 2016)でもある。1950 年代の文化運動を、参加者の身体をめぐる権力闘争として捉える指摘(神長 2012)を踏まえる時、作品発表の場において、発表者をめぐり、いかなる力学が働いていたのかを考察する必要がある。
3　結果、結論：1955 年、知識人と大衆の交流による国民文化の創造と普及を目的とし、文化運動、労働運動のカンパニア組織として国民文化会議が結成された。翌年から開催された国民文化全国集会では労働運動や文化運動の中で作られた映画、演劇、歌などの作品が発表されていた。国民文化全国集会は一面では文化の問題に関する双方向的な討論を行う集会であり、「文化を論じる公衆」(Habermas 1962=1994)を作り出すことを目的としていた。文化作品の発表も具体的な作品を鑑賞したいという労働組合からの要求に応じたものである。他方、作品発表の側面において作品を舞台上で演じる者と、それを鑑賞するものは空間的に分離される。文化作品は人々の前で繰り広げられる公共性(斉藤2000)となり、観客との関係は 19 世紀的聴衆(渡辺 1989)の在り方に、少なくとも形の上では近くなる。
　舞台上で作品を演じる労働者たちにとって、自らの闘争過程を描いた作品の発表は、作品制作を通じた主体化の延長線上にある。他方、全国集会において、舞台上で演じる人々の身体は観客による「評価」にさらされることになる。集会後に参加者が書いたアンケートからは作品発表に対する観客の「まなざし」が読み取れる。観客は総じて国民文化全国集会に文化作品の「最高峰」を求めて集会に参加する。そして集会という、日常の闘争から「分離」された場において、作品の演者が所属する地域の労働運動の活動の歴史の差異などは捨象されることになる。演者と参加者が作品を通じて演者との一体感を感じるというよりもむしろ、参加者にとって文化作品の「出来」／「不出来」が目立つ結果となってしまった。そこに戦後文化運動がもっていた一つの限界があった。

主要参考文献

新堂浩伸,2014,『公会堂と民衆の近代　歴史が演出された舞台空間』,東京大学出版会
吉見俊哉,2016,『視覚都市の地政学―まなざしとしての近代―』,岩波書店